

Lead

All roads lead to the future リード



コミュニケーションペーパー
2015 夏号 **¥0**
Summer 夏号 TAKE FREE



〈特集〉 高知大学、学びの改革

生まれ変わる学部・学科

地域と学び、地域と育つ 地域協働学部始動!

高知大学DYNAMISM(ダイナミズム)いま変わる、学びの場

〈理学部〉Labo通信
理学科地球科学コース
進化古生態学研究室
ぼくらのキャンパスライフ
高知大学ヨット部
まなびの時間
教育学部「科学技術教育コース」
Action! 地域×高知大学
家庭医療学講座
地域の医療を支える
家庭医を養成
高知大学ニュース

仁淀川町 長者地区 / 棚田

高知大学で開催するイベントをご紹介します。

イベントインフォメーション Event information 2015 夏号 Summer 夏号



オープンキャンパスのお知らせ Open campus 2015

朝倉キャンパス

8/1(土) 人文社会科学部 (仮称) 10:00~15:00

●学部紹介 ●入試情報 ●コースプログラム紹介 ●なんでも相談コーナー ●模擬授業・ミニゼミ (詳しくは、人文科学部ホームページで案内します。)
<http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/>

8/1(土) 理学部 10:00~15:00

●学部紹介 ●学部構成と入試概要 ●わたしの大学生活(先輩の話) ●パネル展示と入試相談コーナー ●理学部1・2号館、情報科学棟、地震観測所、水熱化学実験所(附属施設は自由に見学できます。)

8/2(日) 教育学部 10:00~15:00

●学部説明 ●平成28年度の入試について ●学校教育教員養成課程のコース紹介 ●入試相談・生活相談

岡豊キャンパス

8/2(日) 医学科 13:00~16:30

●医学科説明 ●入試情報 ●模擬授業 ●スキルラボ実習体験 ●教員・在学生への質問コーナー

8/2(日) 看護学科 10:00~12:30

●看護学科説明 ●入試情報 ●カリキュラム説明 ●台湾大学短期留学体験談 ●実習室見学・体験 ●教員・在学生への質問コーナー

物部キャンパス

8/2(日) 農学海洋科学部 (仮称) 9:00~16:00

●農学海洋科学部の見どころ・学びとは ●役に立つ入試情報 ●学科・専攻領域コース別企画により各コースの魅力に触れる ●在学生による大学生活紹介 ●パネル展示 ●キャンパス内施設見学と研究室めぐり ●入試・相談コーナー

8/2(日) 土佐さきがけプログラム 9:00~16:00
地域協働学部 11:00~15:00 ※内容は朝倉キャンパスと同じです。

◎企画の内容、開催時間は変更となる場合があります。
◎詳細が決まり次第、順次ホームページに掲載します。(http://www.kochi-u.ac.jp/nyusi/open-campus.html)
◎高知大学ホームページ・携帯電話サイト(http://daigaku.jp/kochi-u/)から申込をお願いします。

メルマガ配信中!
月2回配信(第2・4金曜日)

高知大学からメールマガジンを配信しています。大学の「入試情報」から「あれこれ(これは面白い)」まで!!
登録はこちら <http://daigaku.jp/kochi-u/>



●お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

高知大学 Kochi University
高知大学広報戦略室
高知大学 検索
<http://www.kochi-u.ac.jp/>

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033
〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp



大学の食堂にわくわく!!

8/1(土)・2(日) 10:00~15:00
地域協働学部

●学部紹介 ●入試概要説明 ●学部なんでも相談コーナー ●体験ゼミナール ●学生との交流イベント

8/1(土) 土佐さきがけプログラム 10:00~15:00

保護者向けガイダンス
就職・奨学金・授業 ●サークル紹介
料免除・留学関係の ●なんでも相談コーナー
説明を行います。 ●寮見学



最先端の医療設備を体験!



農学海洋科学部の学びにふれる!

イベント情報

大学にふれて楽しむ催しがいろいろ!

物部キャンパス 一日公開 11/3(火)

地域の特産品、農作物の販売や人気のトレーラー体験コーナーをはじめ、大学を身近に感じられる催しが一杯です。お誘い合わせの上、是非お越し下さい。

第35回南風祭 10/10(土) 10:00~19:00

岡豊キャンパス 10/11(日) 10:00~20:45

一発、笑ってみたいや ~みんなの目はあつたかんだらあ~

笑ったり、舞ったり、学祭だからこそ普段は出来ないようなことにも、臆することなく勝負します。温かい目でみて下さい。今年の学祭もよろしくお祈りします!

黒潮祭 朝倉キャンパス

11月1日(日)、2日(月)に開催します。遊びに来て下さい。

年に一度のお楽しみ!!

様々なイベントをご用意しています!

第6回 11/1(日) ホームカミングデー

今年も、大学祭と同時開催です。卒業生の皆様の多数のご参加をお待ちしています。

記念講演が決定しました。「宮垣陸男氏(株式会社デューク取締役会長)「デュークの原点は、212番教室からはじまった!」

高知大学の最新情報を伝えたい THE こうち ユニバーシティ CLUB

FM 高知 81.6MHz 毎週日曜日放送中 (9:30~9:55)

高知大学のHPから過去放送分も視聴できます!

http://www.kochi-u.ac.jp/outline/kouhou/radio_fm_kochi/
高知大学の教育、研究、地域貢献等のホットな情報をお届けします。

スポンサー企業
高知銀行 / 構築技術コンサルタント
相愛 / ソフテック / アルフレッサ篠原化学



地域と学び、地域と育つ

地域協働学部 始動!



**地域の課題解決を地域と協働して実践する学部として、
地域協働学部が全国に先駆けて誕生しました。
どんな学部なのか、全国から注目が集まる中、
上田健作学部長に話を聞きました。**

学生、大学、地域がともに
成長する新しい学びの形

地域協働学部とは
どのような学部ですか？
キャッチフレーズは「地域力を学生の学び
と成長に活かし、学生力を地域の再生と発
展に活かす」。学生とともに、地域の人も一
緒に学びながら、地域の課題解決に立ち向
かいます。というのがこの学部の基本理
念です。協働のイメージは、大岡裁きの「三
方二損」ならぬ、「三方二得」だと思ってい
ます。学生は自身の成長という成果を得
て、地域は課題解決や地域活性化に向か
い、大学や教員は研究や地域貢献ができる。
そのためには、三方がそれぞれ汗をかき、一
緒に勉強し、地域が抱える問題の解決に
向けた実践を一緒にやるのです。

―地域の協力は不可欠ですね。

そうですね。しかし、この学部は、単に地域を
助ける助っ人のような存在ではない、というこ
とです。地域協働学部にとって、地域は教室で
あり、教材です。学生たちの学びの場となる
地域の皆さんには、軽からぬご負担をかける
ことになると思います。ただ、そうやって協力
をしていただく地域には、長い期間、通わせて
いただくことをお約束しています。地域課題は
簡単に解決できませんし、新たな課題が次々と
出てくるものです。ですから、我々大学としては、

学生はチームに分かれ、4年間活動して
いきます。1年生は地域理解。1学期は県
内各所を回り、地域活動に参加しながら、
地元住民と触れ合って、地域の実情を理解
します。地域の人と話ができるようなコミュ
ニケーションのスキルを養うとともに、チーム
で最高のパフォーマンスを出せるよう、チーム
に貢献する姿勢を持って活動する能力を身
につけます。これは、社会に出てから強く求
められる能力です。講義では、地域を理
解するために必要な知識として地域社会学
概論や産業論、そして調査の技法として社
会調査論や社会調査方法論などを学びま
す。2学期からは「地域理解実習」が始まり、
本格的にヒアリング等の調査、まち歩きなど
などを行って、地域がどういった特性を持っ
ているか、地域がどういった特性を持っ
ているかを明らかにします。2年生になったら、
よいよ企画立案(P)です。地域の課題探求を
行い、地域の特性や特産品を見出す。地域
のお宝探しですね。そして、課題解決に向け
てそれらをどう活かすかのアイデアを出す。こ
れが1学期。そして、2学期にそれにもとづき



地域協働学部 学部長
うえだ けんさく
上田 健作

高知大学文理学部経済学科卒業、
京都大学大学院経済学研究科博士
課程。経済学修士。専門分野は非営
利組織論、公益事業論。「元気のいい
学生の割合が大きいかな。何かやりたい、
何でもやりたいとうずうずしている学生
が大勢いますね。学部における学生
活動も主体的にやりなさい、と言ったら、
ユニフォームをつくらうとかいろいろ
画策していますよ(笑)」

長いスパンでお付き合いしていかないと地域
貢献はできないでしょう。地域の皆さんから
「私たちがやっていけるから、もう来ないで」
と二言われるまで(笑)、しつこく通いたい
と考えています。

―どのような地域が
活動の場になるのでしょうか。

現在、主要な学びのフィールドは6カ所
です。山里や海岸沿いの地域もあれば、高知市
郊外の集落もあります。受け入れていただく
パートナーや目的もさまざま、企業と組ん
で地域を再生しようというものもあれば、地
域住民の皆さんとの地域づくりもあります。
また、県産品を販売するアンテナショップとの
協働で、特産品の開発や掘り起こしをして
いくことも計画しています。

―高知県は学びのフィールドとして
いかがですか？

全国各地が、似たような地域課題を
抱えています。ただ、高知県は高齢化をは
じめとする課題が、全国よりも10年先を
進んでいるといわれます。さらに、防災とい
う大きな課題もある。いずれも取り組み
がいのある課題だといえるでしょう。また
地域に入ると、異邦人(ウエルカムする土
佐人)気質を感じます。だから、学生に対す
る受け入れもとてもオープンで、パートナ
シップを組みやすい土地柄だと思います。

実施計画を立てます。3年の1学期に地域の
人と協働でそれを実施(D)し、終わった後は当
然チカラで改善策を作り(C・A)ます。こ
れら連の流れに、企画段階から地域の方にも
関わっていただきます。地域の人と一緒に考え、
課題を共有し、実施し、評価する計画です。

―地域協働学部では、4年間の学びを
通してどのような人材の育成を目指して
いますか？

地域協働型産業人材の育成を目指してい
ます。これは、協働を組織でき、最終的に産業
振興に向けた視点を持って動ける人材のこと
です。地域の問題を最終的に解決するには、
福祉的な問題解決だけでなく、産業を起こし
て働く場所を作り、若い人が地域に定住でき
るようにする必要があります。ですから、学
生諸君には協働実践力とビジネス感覚の両方
を持った人材に育てほしい。具体的には、「産
業の協働リーダー」「行政の協働リーダー」
〔アントレプレナー・起業家〕を育成します。



**協働実践力と
ビジネス感覚を兼ね備えた
人材を地域で育てる**

―これまでも高知大学では、さまざま
形で地域と連携してきましたが、学部が
できたことでどう変わったのでしょうか？

地域に出かける時間が圧倒的に増えました。こ
れまでの学問体系を柱とするカリキュラムでは、本
格的に地域で活動しようとするには、土曜日や日曜
日を使うしかありませんでした。しかし、地域協
働学部では、地域での活動を平日に行える時間割
を編成しています。1年生は毎週火曜日、地域に
行くことができる日を設けています。このような
時間割が組めるのは学部ができたからこそです。
多くの時間、現地に行つて活動することができ
るので、これまでに比べてより多くの成果を出せる
だろうし、出さなければいけないと考えます。

―今年入学した67名の学生は4年間、
どのように学んでいくのですか？

実践活動を柱に、カリキュラムを組んでいます。
そして地域協働のためのPDC(A)計画、実行、
チカラ、改善を4年間に分けて順次行います。

学びの フィールド 〔仁淀川町長者棚田〕



「冷てー」。そんな男子学生の叫びが、山に
こだまします。5月のある日、地域協働学部の
学生が行ったのは、高知県の山間部、仁淀川町
の棚田での田植え体験です。水の張られた田ん
ぼに入った学生たちは、水の冷たさや泥の感触
に歓声をあげていました。地域の人に教わりな
がら、慣れない手つきで恐る恐る苗を植えてい
く学生たち。作業を通して地元の人とも話が
できる。見ただけ、本を読んだだけではわから
ない地域の姿を、実習経験を通して学ぶことが
できます」と引率していた大石達良教授。

宮崎県出身の1年生、山中七海さんは、「田植
えは難しいですね。でも、座学より楽しいです。
地域の良さを活かし、地域の力になれるよう
人になりました。地域協働学部に入りました」と
話します。学生たちを受け入れるのは仁淀川
町長者地域の住民グループ、「だんだんくら
ぶ、田植えの準備など、学生たちの活動をサ
ポートします。若い人の笑い声を聞くと元氣
が湧いてきます。新しい風は地域に必要なやね。
学生たちが来るとなれば、準備もあるし、当日
は仕事も休まないかん。それでも、あわてず、
ゆつくり、じつくり、一緒に育つていこうと思
ちよります」と、会長の西森勇幸さんは学生
たちとの協働に期待をふくらませています。





「教育学部は従来、学校教育教員養成と生涯教育の2つの課程がありましたが、教員養成一本に絞り、教員養成学部へと特化しました」

新しい教育学部は、小学校および中学校（あるいは特別支援学校）の教員養成を一体的に行うことが特色です。また、今年度から新たに保育士資格と幼稚園教諭一種免許の取得を必修にした幼児教育コースも新設しています。

「小中一貫校や幼保一体のことも園などが今後増加するとみられており、その流れに対応した取り組みです。たとえば教員

今年度から平成29年度にかけて、医学部をのぞく全学で、高知大学の学部や学科が大きく変わります。今年度は大学として38年ぶりの新学部となった地域協働学部（PI参照）が設置され、また教育学部も新しい体制へと生まれ変わりました。

PRESENT (現在)
地域で活躍する
人材育成に向けて



平成28年度
再編予定
人文社会科学部



平成29年度
再編予定
理工学部

生まれ変わる学部・学科

高知大学、
学びの改革

地域協働学部の開設にとどまらず、いま、高知大学は大きく変わろうとしています。学びの場がどう変わり、どんな未来に向かっていくのか。これからの高知大学の姿に迫ります。

「人文科学」と社会科学を融合した、「人文社会科学」という新しい概念、新しい学問のもとで人材の育成を図ります。従来の人文科学や社会科学の枠のなかでは、どうしても学びが狭くなる。幅広い領域の学びが、改組によって可能になります」

従来、人文科学は3学科あり、それぞれ

「人文科学」と社会科学を融合した、「人文社会科学」という新しい概念、新しい学問のもとで人材の育成を図ります。従来の人文科学や社会科学の枠のなかでは、どうしても学びが狭くなる。幅広い領域の学びが、改組によって可能になります」

従来、人文科学は3学科あり、それぞれ

「高知県は2000m級の高山を持ち、狭い平野を挟んで、海は一気に水深3000mの南海トラフの急峻な海底へと落ち込みます。山と深海底の間はわずか数十kmで、こんな場所は日本広しといえどもなかなかない。今回の改組で、これらのすべてを統合的に研究し、学ぶことができる学部は生まれ変わります」

これまでの農学を学ぶ「農林資源環境科学科」「農芸化学科」に加え、「海洋資源科学科」を新設。水産系生物資源、海底鉱物資源、海洋生物の遺伝子資源について学ぶ3つのコースに分かれ、「海を知り、海を使い、海を維持・管理する」総合的

「高知県は2000m級の高山を持ち、狭い平野を挟んで、海は一気に水深3000mの南海トラフの急峻な海底へと落ち込みます。山と深海底の間はわずか数十kmで、こんな場所は日本広しといえどもなかなかない。今回の改組で、これらのすべてを統合的に研究し、学ぶことができる学部は生まれ変わります」

これまでの農学を学ぶ「農林資源環境科学科」「農芸化学科」に加え、「海洋資源科学科」を新設。水産系生物資源、海底鉱物資源、海洋生物の遺伝子資源について学ぶ3つのコースに分かれ、「海を知り、海を使い、海を維持・管理する」総合的

FUTURE (未来)
高知大学らしさを前面に
打ち出した学部や学科に

「高知県は2000m級の高山を持ち、狭い平野を挟んで、海は一気に水深3000mの南海トラフの急峻な海底へと落ち込みます。山と深海底の間はわずか数十kmで、こんな場所は日本広しといえどもなかなかない。今回の改組で、これらのすべてを統合的に研究し、学ぶことができる学部は生まれ変わります」

これまでの農学を学ぶ「農林資源環境科学科」「農芸化学科」に加え、「海洋資源科学科」を新設。水産系生物資源、海底鉱物資源、海洋生物の遺伝子資源について学ぶ3つのコースに分かれ、「海を知り、海を使い、海を維持・管理する」総合的

「高知大学の改革は、平成20年度の大学院改革から続くものです」

こう話すのは、高知大学教育担当理事である、深見公雄副学長です。

平成20年度以前の高知大学は、たとえば農学部の上に農学研究科があるというように、各学部の上に研究科（大学院）がある縦割りの体制でした。この場合、専門性は深まりますが、一方で教育・研究の範囲は狭くなってしまう。これでは学際性が求められる世の中で通用しなくなる恐れがあることから、大学院の一本化に取り組みました。こうして平成20年度に、新たな大学院「総合人間自然科学研究科」がスタートしたのです。

「学部についてはそれぞれ学ぶ目的が違うので、1学部にとまどめてしまうのは困難です。しかし、相互乗り入れ的な学問体系のキャリアプログラムをつくり、時代のニーズにこたえる必要があります。そこで、学部の垣根を取っ払った分野融合型の「土佐さきがけプログラム」を平成24年度に設置しました」

土佐さきがけプログラムは、「グリーンサイエンス人材育成コース」「国際人材育成コース」「生命・環境人材育成コース」「スポーツ人材育成コース」の4コース。学部・学科から独立して、独自のキャリアで学んでいます。

「土佐さきがけプログラムは、現在進んでいる全学的な学部の改組のモデルケースにもなったと考えています。同プログラムの設置後、今度は3年かけて各学部学科の見直しを進めました」

「高知大学の改革は、平成20年度の大学院改革から続くものです」

こう話すのは、高知大学教育担当理事である、深見公雄副学長です。

平成20年度以前の高知大学は、たとえば農学部の上に農学研究科があるというように、各学部の上に研究科（大学院）がある縦割りの体制でした。この場合、専門性は深まりますが、一方で教育・研究の範囲は狭くなってしまう。これでは学際性が求められる世の中で通用しなくなる恐れがあることから、大学院の一本化に取り組みました。こうして平成20年度に、新たな大学院「総合人間自然科学研究科」がスタートしたのです。

「学部についてはそれぞれ学ぶ目的が違うので、1学部にとまどめてしまうのは困難です。しかし、相互乗り入れ的な学問体系のキャリアプログラムをつくり、時代のニーズにこたえる必要があります。そこで、学部の垣根を取っ払った分野融合型の「土佐さきがけプログラム」を平成24年度に設置しました」

土佐さきがけプログラムは、「グリーンサイエンス人材育成コース」「国際人材育成コース」「生命・環境人材育成コース」「スポーツ人材育成コース」の4コース。学部・学科から独立して、独自のキャリアで学んでいます。

「土佐さきがけプログラムは、現在進んでいる全学的な学部の改組のモデルケースにもなったと考えています。同プログラムの設置後、今度は3年かけて各学部学科の見直しを進めました」

「高知大学の改革は、平成20年度の大学院改革から続くものです」

こう話すのは、高知大学教育担当理事である、深見公雄副学長です。

平成20年度以前の高知大学は、たとえば農学部の上に農学研究科があるというように、各学部の上に研究科（大学院）がある縦割りの体制でした。この場合、専門性は深まりますが、一方で教育・研究の範囲は狭くなってしまう。これでは学際性が求められる世の中で通用しなくなる恐れがあることから、大学院の一本化に取り組みました。こうして平成20年度に、新たな大学院「総合人間自然科学研究科」がスタートしたのです。

「学部についてはそれぞれ学ぶ目的が違うので、1学部にとまどめてしまうのは困難です。しかし、相互乗り入れ的な学問体系のキャリアプログラムをつくり、時代のニーズにこたえる必要があります。そこで、学部の垣根を取っ払った分野融合型の「土佐さきがけプログラム」を平成24年度に設置しました」

土佐さきがけプログラムは、「グリーンサイエンス人材育成コース」「国際人材育成コース」「生命・環境人材育成コース」「スポーツ人材育成コース」の4コース。学部・学科から独立して、独自のキャリアで学んでいます。

「土佐さきがけプログラムは、現在進んでいる全学的な学部の改組のモデルケースにもなったと考えています。同プログラムの設置後、今度は3年かけて各学部学科の見直しを進めました」

「高知大学の改革は、平成20年度の大学院改革から続くものです」

こう話すのは、高知大学教育担当理事である、深見公雄副学長です。

平成20年度以前の高知大学は、たとえば農学部の上に農学研究科があるというように、各学部の上に研究科（大学院）がある縦割りの体制でした。この場合、専門性は深まりますが、一方で教育・研究の範囲は狭くなってしまう。これでは学際性が求められる世の中で通用しなくなる恐れがあることから、大学院の一本化に取り組みました。こうして平成20年度に、新たな大学院「総合人間自然科学研究科」がスタートしたのです。

「学部についてはそれぞれ学ぶ目的が違うので、1学部にとまどめてしまうのは困難です。しかし、相互乗り入れ的な学問体系のキャリアプログラムをつくり、時代のニーズにこたえる必要があります。そこで、学部の垣根を取っ払った分野融合型の「土佐さきがけプログラム」を平成24年度に設置しました」

土佐さきがけプログラムは、「グリーンサイエンス人材育成コース」「国際人材育成コース」「生命・環境人材育成コース」「スポーツ人材育成コース」の4コース。学部・学科から独立して、独自のキャリアで学んでいます。

「土佐さきがけプログラムは、現在進んでいる全学的な学部の改組のモデルケースにもなったと考えています。同プログラムの設置後、今度は3年かけて各学部学科の見直しを進めました」

PAST (過去)
学問の枠にとらわれない
新しい学びを求めて



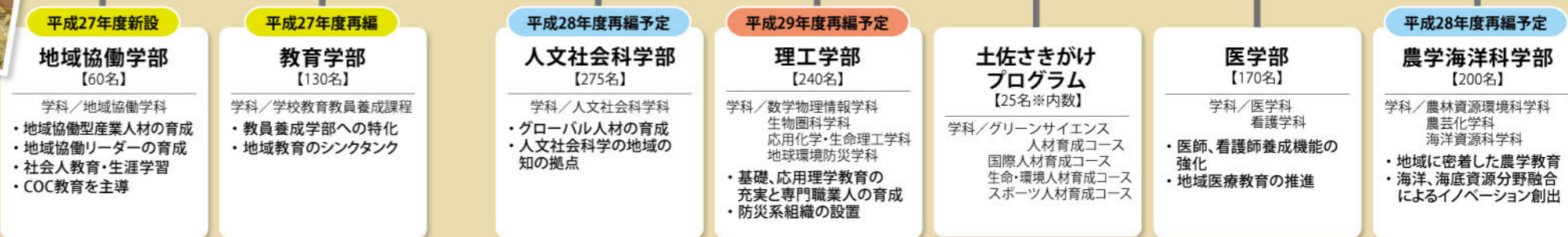
高知大学理事(教育担当)副学長
ふかみ きみお
深見 公雄
京都市出身。京都大学農学部卒業、東京大学大学院農学系研究科博士課程水産学修了。農学博士。海洋微生物生態学・海洋環境保全学が専門だが、最近は大企業業務が忙しく、研究ができなさと嘆く。「専門は海ですが、趣味は登山。いい気分転換になるんです」

高知大学 教育組織移行図

改革方針/機能強化のための再編成、地域再生の核となる大学、総合的教養教育の実現、専門職業人の育成強化

(平成27年度以降)

学士課程 (6学部: 入学定員 1,075名)



※人文社会科学部、農学海洋科学部は認可申請中、理工学部は構想の段階のため、内容は予定であり、変更する場合があります。
※人文社会科学部、農学海洋科学部、理工学部の学部名称及び学科名称は、全て仮称です。

「化石の進化」

理学部理学科地球科学コース進化古生態学研究室

教員 近藤 康生教授 × 学生 山岡 勇太さん

「進化古生態学」とはどのような研究分野なのでしょう？

近藤 一言でいえば化石の研究で、研究室の主なテーマは二枚貝です。化石の研究には珍しいものを探してその意義や価値を見出す方法もありますが、私の場合、ありふれた化石の中に隠された意味を探ることのほうに興味を引かれます。そこで学生の頃から、一見平凡な二枚貝の化石を研究してきました。

山岡さん、研究室に入ったのも、化石が好きだったからですか？
山岡 じつは地球科学コースではなく、生物科学コースに入学したのですが、次第に化石をやりたいと思うようになり、4年生の時から、近藤先生にご指導いただくようになりました。いま生きている生物だと、いまの時間では観察できませんが、化石だと想像できないような時間をさかのぼって向き合うことができます。ここが化石の研究の大きな魅力ですね。

近藤 いま私が、熱くなっているのは安田町です。以前から化石の産地として知られてはいたのですが、数年前、また別の新しい産地を発見したんです。従来の場所よりも数10万年古い、約300万年前の地層で、非常に面白い貝が続々と出てきます。しかも、保存状態が抜群にいい。見た目がきれいなだけでなく、変質が少なく化学分析もしやすいんです。

山岡 化石の研究は、やはり発掘からスタートするのでしょうか？
近藤 はい。まずフィールドに行つて発掘します。安田町の場合は、工事によって露出した斜面が現場です。化石は固まりかけた砂や泥の中に埋まっているので、ハンマーで周りの堆積物ごと掘り出すんですが、とても壊れやすいんですよ。壊しながら経験を積んでいき、掘り出すのがだんだんうまくなっています。

安田町の化石に、私は熱くなっています！



発掘した化石に興味をもち、生物科学コースから地球科学コースへ転じた山岡さん。



海を通じて地域交流



「全日本学生」への出場多数 中四国の強豪サークル

毎週土・日曜、香南市夜須地区にあるマリンスポーツの拠点「YASU海の駅クラブ」に、日焼けをした学生たちが集まっています。彼らは高知大学ヨット部。所有する8艇のヨットを使って、午前9時から午後5時まで、ヨットハーバーの沖合で熱心に練習に励みます。

ヨット部は本学(朝倉・物部キャンパス)と医学部にそれぞれありますが、主に合同で活動。部員は現在、計26名。他大学を含めて6名の女子部員も、海風に吹かれながら力強く操舵しています。

「風を受けて走るの、本当に気持ちいですよ!」と声を揃えるのは、本学主将の東本周樹さんと、医学部主将の小島貴弘さん。部員のほぼ全員が、大学に入ってヨットを始めたのだとか。「ほくも未経験でした。ヨットは本当に面白いんですが、どう面白いのか、言葉で伝えるのは難しいですね。新入生には、とにかく乗りに来てほしい。乗れば

高知大学ヨット部

本学13名、医学部13名で構成。外部コーチなどはおらず、自主的に運営されている。上級生が下級生を指導し、練習に励んでレースに臨む。「海の駅YASU」と連動し、地域との交流やレース運営サポートなども積極的に行っている。



ヤシバーク清掃ボランティア



身体障害者を持つ方でも操作できるヨットの指導



上記写真、右から東本 周樹さん(農学部生命化学コース4年生) 小島 貴弘さん(医学部医学科4年生)

ボランティア活動などで 地域と温かいふれあい

日頃の練習やレース出場に加えて、地域との交流を重視しているのがヨット部の特徴。ボランティア活動として、年4回ほど、地域の人や海の駅利用者などと一緒には、ヨットハーバー近くの浜の清掃をしているそうです。ほかにも、障害者ヨット部の指導や、津波を想定した防災避難訓練の参加などを行っています。

「夜須中学校で行われる地域の運動会にも参加しています。早食い競争に出たり、盆踊りを踊ったり。もち

ろん、夜の打ち上げも楽しかったですよ(笑)」と東本さん。積極的に交流を図ることにより、地域にすっかり溶け込んでいるようです。

夜須の海で開催されるレースのサポートも行っているとのこと。オープンヨット大会「龍馬カップ」や、「ヤシカヤックマラソン」では、レスキューとしての待機や、コースを示すマークの会場設置など、大会運営を手伝っています。今年の「龍馬カップ」大会告知ポスターでは、高知大学ヨット部が操舵する写真が大きく使用されました。ヨット部の地域に対する貢献度の高さがわかります。

オープンヨットレースの香南市長杯「龍馬カップ in KOCHI」の運営



貝の化石から進化の過程を探る。



多い時には週のうち3〜4日、化石を掘っています。

すごい化石を見つけたら、「なんじゃこりゃ!」って興奮。

山岡 まだまだハンマーを入れる一投目で壊してしまうことが多いですね。見えただけでは割っている...という。でも、化石の研究の中で、ぼくは発掘している時が一番好きです。晴れた日にハイキング気分です。掘るのは最高ですよ(笑)。

近藤 化石を掘り出したら、デザインナイフで表面の堆積物を削り、筆で砂を履き除いて、形などの特徴を観察できる状態にします。これをクリーニングというんです。この作業もなかなか難しく、壊したり割ったりすることも少なくありません。うまくクリーニングできたら、その化石が何なのか、徹底的に調べます。

山岡 ぼくも、トリガイの祖先ではないか、と思われる化石を発見しました。今年秋、「化石」という学術雑誌に論文が掲載されます。今後、いま生きている貝がどのように進化してきたのか、その前身になる種の化石を研究したいですね。

近藤 いまは進化に関する研究の手がかりを少しつかんだ状態。この勢いで研究を進めて、もっと多くの貝の起源を調べ上げたい。安田町のフィールドなら、それができます。また、大学の研究とは別に、安田町が整備した化石採集場で、子どもたちが参加する「化石採集会」の指導をすることもあっています。こうした地域貢献の普及活動も並行して行っていきたいですね。



PROFILE 教育学部 自然科学系 理学部 教授 近藤 康生 (写真左)

岐阜県出身。静岡大学理学部卒業、東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。学生の時には主に関東や北陸の化石を調査。いまは安田町の化石に心を奪われているとか。「日本の貝がどうやって進化したのか、少しずつ見えてきました。化石の研究の醍醐味かもしれません」

総合人間自然科学研究科 応用自然科学専攻 博士課程2年 山岡 勇太さん (写真右)

愛媛県出身。高知大学理学部生物化学コース卒業。ただし、卒業は近藤教授の指導のもとで執筆。論文に「異時性による現生種二枚貝への進化」(北部太平洋温帯域における海産貝類の種分化)など。「できれば将来も研究の道に進みたい」

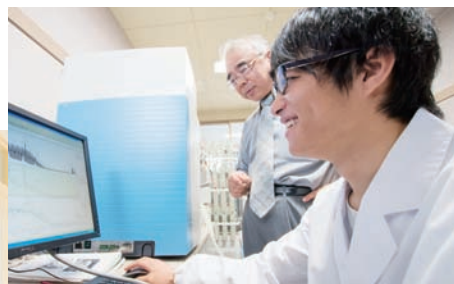
**新しい教科の視点
理科と技術科を一体化した
新コースが教育学部に誕生**

ものづくり大国日本の復権が叫ばれる昨今。科学技術の国際競争に勝ち抜くため、国をあげて人材育成に力を入れています。そんな社会情勢を受け、高知大学では平成26年度、教育学部に新しいコースを創設しました。理科と技術科を一体化したカリキュラムを設けた科学技術教育コースです。

「世の中は科学と技術が二体化し、科学技術として社会の基盤を形成しています。しかし中学・高校の学校教育では、それぞれ理科と技術科という独立した教科になっています。そこで、科学と技術の関連性を活かした授業をすることが出来る教員の養成を目指しました」と蒲生啓司先生は話します。

蒲生先生によると、理科と技術科の内容は密接な関係があると言います。たとえば、理科の単元「運動とエネルギー」および「電流とその利用」の学習と、技術科の単元「機械・電気エネルギーの変換技術」に関する学習とは、互いに補い、一体的な関係にあるとのこと。同様のことが、「化学変化と原子・分子」と「材料と加工に関する技術」、「植物の生活と種類」と「生物育成に関する技術」などのように関連付けられます。

「このように密接な関係にある科学と技術を連携・一体化させたプロ



PICK UP LECTURE
まなびの時間
高知大学の講義・研究

21世紀型の
科学技術リテラシーを育む
理科・技術科の教員を養成

教育学部・
科学技術教育コース

プログラムによる教員の養成が、科学技術教育コースです。自然の法則性の探究を目的とする理科教員としての素養と、自然の法則性を活かしたものづくりを目的とする技術科教員としての素養の両方を習得することが出来ます」

**高知の資源を活かした
独自のカリキュラムで
新たな教師像を目指す**

実際に、本コースを選択した学生は、どのような学びを実践するのでしょうか。

「このコースでは、理科と技術科の2つの教員免許の取得を義務付けています。さらに、理科と技術科を一体化させた独自の教育プログラムを新たに設け、自然の観察と環境の理解、地域の伝統および科学技術の習得を通じて科学技術リテラシーを育みます」

1年生では、高知の自然をフィールドとした『自然観察』が必修です。2年生では、『実験とものづくり』の基本を学びます。3、4年生では、科学と技術の互いに関連する分野を、『科学技術教育総合演習』として学習し、教材開発や学習指導の習得に結び付けます。

「コースの特徴は、高知の自然や地域資源を活用したカリキュラムを設けていることです。たとえば、高知県立牧野植物園や高知大学内にある海洋コア総合研究センターでの実習を計画しています。また4年生では、

県内の製造企業でのインターンシップを実施します。製品開発のコンセプトは何か、世の中で何が求められているのかということ、製造・生産の現場で体験します」

こうして授業実践力と教材開発の技術力を身に付けた理科および技術科教員による授業で、児童生徒の授業への理解・関心がより深まるとともに、地域の科学技術教育力の向上にもつながると大学では考えています。

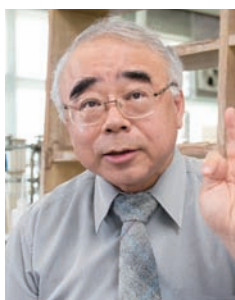
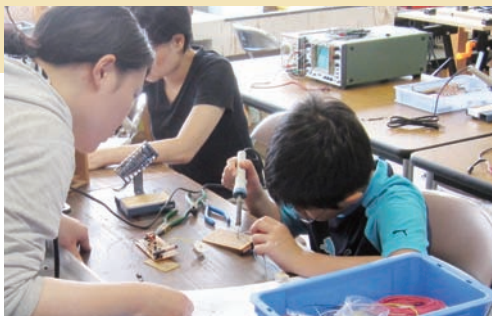
「まだコースはスタートしたばかり。これからどんどん、講義や実習を通じて理科と技術科のさまざまな領域を学んでほしい。そして、科学技術教育ができる教員に育ててもらおうべく、私たち大学教員も力を尽くしたいと思います」

先生に聞きました!

教育研究部 総合科学系
複合領域科学部門 教授
教育学部 科学技術教育コース長

がもう けいじ
蒲生 啓司

東京工業大学大学院博士課程修了、理学博士。専門は分離化学、有機化学。「将来的には、『科学技術科』という新しい教科を作り、中学校や高等学校での授業に反映できればと考えています」



家庭医療学講座
地域の医療を支える
家庭医を養成

**医学の専門分化とともに
地域では家庭医が減少…
この状況を変えたい!**

「医学が発展すると専門分化が進み、一人ひとりの医師が診る領域は狭く、深くになっていきます。治療が進歩するのはもちろん良いことですが、その一方で、1つの診療所をさまざまな病気の人が受診するという、地域の実情には合わなくなっています」

こう語るのは医学部の阿波谷敏英教授。高知県中山間地の橋原町の病院など地域医療の最前線を経験したのち、2007年に高知大学に赴任。「家庭医療学講座」開設の立役者となり、良質な家庭医（プライマリ・ケア医）の養成に取り組んできました。

「10年前は、若くして医師の減少傾向が目立っています。専門性を高めるには大きな病院のほうに適しているため、経験の少ない医師が都市部に集中しやすくなるのが理由だとか。阿波谷先生が率いる

「家庭医療学講座は、疲弊した地域医療の再生に向けた推進力になってほしいと、各方面から期待されています」

「家庭医療学講座が目指すのは、特に高知県のへき地で活躍する家庭医の養成です。加えて、地域をベースとした臨床疫学的研究、生涯教育のプログラム作成、家庭医療の普及啓発活動なども、我々の重要なミッションです」と阿波谷先生は話します。

**高知大学ならではの取り組み
地域の人と交流する
ユニークな「家庭医道場」**

「家庭医療学講座」の講義・実習のなかでも注目されるのが「家庭医道場」。医学科だけではなく、看護学科の学生も参加できる課外実習です。

「道場」についても、別に相手や乱取りをするのではありません(笑)。何かを与えてくれるのを待つのではなく、自分からアク



**高知市立土佐山へき地
診療所**

高知大学医学部は2008年より、「高知市立土佐山へき地診療所」の指定管理者として運営しています。国立大学が公的医療機関の指定管理者になったのは全国初。「よくある当たり前の病気があります。『へき地診療所』はそうした初期医療の患者さんとふれ合えるプライマリ・ケアの場と位置付けています」と阿波谷先生。学生たちは中山間地の医療現場で、大学病院では教えないことを学んでいます。



教育研究部 医療学系
医学教育部門
医学部
家庭医療学講座
教授

あわ谷に としひて
阿波谷 敏英

高知市生まれ。自治医科大学卒業。大月病院、松原診療所長、橋原病院長、高知医療センター総合診療部長などを経て、2007年より高知大学医学部教授。「専門は、その地域に必要な医療を研究すること。地域に軸足を置いて学生を育てるのが仕事です」



シオンすることによって得られることが大切。こつた意味を込めて、家庭医道場と名付けました」

開催は年2回。応募が定員を超える時もある人気実習で、毎回30〜40人の学生が参加します。主に春は馬路村、秋は橋原町で1泊2日の合宿。学生実行委員会が準備をし、講演会や報告会など、趣向を凝らした企画を立てるそうです。

5月に行った「家庭医道場2015 in 馬路村」では、診療所見学や村長の講演に加えて、地元の産業や観光、川遊びなどの「連

人たちに話を聞いたとのこと。「ベースは地域の人と必ず交流すること。地域を知ることにより、家庭医に必要な知識や技術、コミュニケーション能力を身に付けることができます」と阿波谷先生は「家庭医道場」の狙いを説明します。

「高知県の地域医療を実際に見て勉強したら、きっと将来の役に立ちます。高知大学ならではの取り組みにより、高知大学で学びたい、入学して良かったと思ってもらえるようにしたいですね」と阿波谷先生は意欲的に語ってくれました。

地域協働学部開設記念式典を挙

地域協働学部の開設記念式典を4月18日、高知市内のホテルで開催しました。



▲地域協働学部の教員紹介の様子

記念式典では、脇口宏学長が「地域協働学部の開設で大学教育に風穴を開け、高知県を再生・発展させる」と挨拶。続いて、尾崎正直高知県知事、岡崎誠也高知市長、文科省の義本博司大臣官房審議官から祝辞が述べられ、新学部へのエールが送られました。

また、式典後に行われた同学部新入生によるポスター発表では、1年生67名が「地域の幸せのために挑戦」「自分の限界を超える」と入学動機や地域再生・振興に取り組み意気込みを語り、参加者から「予想以上に期待できる学生たちで、頼もしい」との声が多く寄せられました。



▲来賓にプレゼンする新入生



▲地域協働学部 銘板披露の様子(4月1日)

AMDAグループと連携協定を締結

さらなる協力関係の発展を

高知大学は、4月14日にAMDA(アムダ)グループと連携協定に関する協定を締結しました。AMDAグループは、岡山市に本部を置くNPO法人で国内外での災害や紛争発生時に医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開しています。これまでも、高知大学医学部と、同グループの特定非営利法人AMD Aとの間で、2009年に連携協定を締結し、医師をネパールの病院に派遣するなど協力関係にありましたが、今回、全学部包括的な協定とすることにより、医療、保健、自然・環境、文化・教育の各分野で幅広い連携が可能になりました。今後、学部の授業科目におけるAMDA関係者による講義等、さらなる協力関係が進むことが期待されています。



▲医学部医師の海外での支援活動の様子



▲海外の診療所

康 峯梅教授 文部科学大臣表彰 科学技術賞を受賞

有害物質除去に、極めて高い有効性

農学部の康 峯梅(かん ゆうめい)教授が、平成27年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞しました。科学技術分野の文部科学大臣表彰は、科学技術に関する研究開発において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えるものです。

康教授の受賞業績となった「環境浄化用高性能鉄吸着剤の開発と応用に関する研究」は、同教授が高知大学に赴任した平成8年より継続して行っているもので、開発した環境浄化用の非晶質水酸化鉄吸着剤は、地下水や土壌中にあるヒ素等の有害物質除去に、極めて高い有効性が示されました。今後、空気清浄器、エアコンフィルター等への利用も期待されています。



▲康教授(前列左)

陸上競技部が3種目で優勝!

男子4×100mリレー 日本陸上競技選手権大会の出場権獲得

第69回中国四国学生陸上競技対校選手権大会(5月14～16日 岡山市)において、高知大学陸上競技部の学生が男子4×100mリレー、女子高跳び、女子やり投げの3種目で優勝し、中四国代表として9月11日から大阪府で開催される日本学生陸上競技対校選手権大会(日本インカレ)に出場することが決定しました。また、男子4×100mリレーでは日本陸上競技選手権大会リレー競技の参加標準記録を突破し、10月23日から神奈川県で開催される同大会への出場権を獲得しました。優勝を果たした学生の氏名と記録は次のとおりです。



▲日本陸上競技選手権大会出場を決めたリレーメンバー

【優勝】

男子4×100mリレー 記録 40秒44(予選40秒40)

- 第1走者 石丸 混貴(理学部2年)
- 第2走者 諏訪 祐佑(大学院教育学専攻M2)
- 第3走者 横山 新太郎(教育学部3年)
- 第4走者 江國 隼斗(教育学部4年)

女子走り高跳び 記録1m70

久保 みなみ(人文学部3年)

女子やり投げ 記録49m63 ※

佐藤 ひめか(教育学部4年)
*大会新記録、香川県記録

四万十町と連携に関する協定を締結

将来を担う子供、産業人材の育成を

高知大学と高知県四万十町は、人材育成と産業振興を柱とする連携協定を3月30日に締結しました。

人材育成に関しては、「四万十町人材育成基本方針(各分野リーダー育成、将来を担う子供の育成、産業人材の育成)」を実現するため、その人材育成戦略を検討・策定する「人づくり委員会」に大学が企画段階から参画し、大学のこれまで培った人材育成の知見を提供し、共に人材育成プログラムの構築を目指していくことにしています。

また産業振興については、四万十町の基幹産業である一次産業の振興を目的として、一次産品の成分分析を実施し、その機能性や効能を検証するなど高付加価値化を図るべく受託研究等を進めています。



▲協口学長(左)と中尾町長

学会賞受賞等紹介 (平成27年3月～5月 教職員受賞分)

農学部門 深田陽久准教授
柑橘類を用いた新しい養殖ブリ(香るブリ)の開発
平成26年度日本水産学会 水産学技術賞

基金 「高知大学さきがけ志金」 ご寄附のお願い

■高知大学さきがけ志金の目的
高知大学の理念である『地域社会及び国際社会に貢献しうる人材育成と学問、研究の充実・発展を推進する』ため、これらに対する事業の支援とその環境の更なる整備・充実に努めることを目的とします。

■募金の対象者
本志金の趣旨に賛同いただける個人・法人・団体等

■ご協力をお願いする金額
個人による寄附金につきましては、1口1千円を単位とします。法人・団体等による寄附金につきましては、1口1万円を単位とします。(本志金の趣旨をご理解いただき、なにとぞ複数口でのご協力をお願いします。)

■高知大学さきがけ志金ホームページ
インターネットのウェブ検索サイトで「高知大学さきがけ志金」と入力いただき、検索をお願いいたします。

高知大学さきがけ志金

■お問い合わせ先
〒780-8520 高知市曙町二丁目5-1
高知大学さきがけ志金担当 TEL:088-844-8100
FAX:088-844-8738 E-mail:sj02@kochi-u.ac.jp

サッカー部 全日本大学サッカー トーナメント出場へ

15年連続25度目の優勝

高知大学サッカー部は、5月17日に行われた四国大学サッカートーナメント決勝戦に勝利し、15年連続25度目の優勝を果たしました。

その結果、8月7日から関西地区で開催される第39回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントに四国代表として出場します。

ソフトボール部 全日本大学選手権大会出場へ

全日本大学選手権大会出場決定

高知大学ソフトボール部は、5月23日、24日に徳島市で行われた、四国地区予選会で準優勝し、8月28日から三重県で開催される第50回全日本大学選手権大会への出場を決めました。

また、8月7日から京都市で開催される第47回西日本大学選手権大会にも出場します。